三部の燕行録から見た朝鮮文人の中国観

韓　梅（山東大学）

1、序言

燕行録は中国に派遣された朝鮮王朝使者の見聞録として広く知られている。概ね明朝へ派遣された際の見聞録が“朝天録”、清朝へ派遣された際の見聞録が“燕行録”と言われている。一般に、この二つの文献をまとめて“燕行録”と言われており、本文でもこの表現に従う。燕行録は数多くあり、内容も豊かで、ある面から当時の中韓両国の関係や文化交流、中国社会のさまざまを詳細かつ客観的に記述している。また朝鮮文人の中国に対する理解や認識を反映し、その思想意識や朝鮮王朝の社会状況を間接的に投射したものとして、中韓の関係、交流、文化、思想の歴史の究明にとって重要な価値がある。そのため、燕行録は長く学界に注目され、そのうち重要な作品として、例えば、『熱河日記』を中心とする北学派燕行録の研究には、すでにある程度の成果がある。但し、筆者は、中韓交流の歴史を全面的に再現するために、個別の重要な作品のほかに、現存の燕行録についてひとつひとつ考察したうえで、貴重な資料として十分に掘り下げて利用しなければならないと考えている。幸い、燕行録の資料発掘と整理は大きな進展を遂げた[1]。そこで本文では、まだ十分に研究されていない燕行録三部を取り上げ、研究対象にしたい。即ち、許葑の『朝天記』、金堉の『朝京目録』と李田秀の『入沈記』である[2]。

『朝天記』は、1574年朝鮮の宣祖が明朝に使節を派遣するに際し、書記官として中国へ赴く許葑が書いた日記体紀行文である。旅行中に下書きが出来、1575年に完成した。作者許葑（1551–1588）は、号荷谷、字美叔、名高い陽川許氏に生まれた。父親の許曄師は著名な儒学者徐敬徳に従い、許葑は弟の許筠、妹の許蘭雪軒とともに作文で名が知られている。『朝天記』は上、中、下三巻及び付録の「渡江録」の四部からなり、本文の前に柳成龍作の「序」、後に作者の「跋」が添えられる。全

---

[1] 『燕行録選集』、韓国成均館大学大東文化研究院、1969
『国訳燕行録選集』、韓国民族文化推進会、1976
『朝天録』、台湾珪庭出版社、1978
林基中編、『燕行録全集』、東国大学出版部、2001

[2] この三部に関する研究はまだわずかである。以下を参考されたい。
尹南漢、「朝天記解題」、『国訳燕行録選集』、民族文化推進会、1976
韓梅、「許葑『朝天記』の研究」、成均館大学国語国文学部修士論文、1999
韓梅、「許葑『朝天記』の紀行文学特徴」、『第三回韓国学国際会議論文集』、山東大学出版社、1999
陳尚勝編、『朝鮮王朝の対中観の変遷』、山東大学出版社、1999
李鍾述、「朝京日録解題」『燕行録選集（2）』、成均館大学大東文化研究院、1969

文は許葑遺作の『荷谷集』に収録され、許筠によって1605年初に出版された。また1707年曾孫許奎によって再版された。現存の『荷谷集』は許奎の刊行によるもので、韓国中央図書館に所蔵され、本文の底本でもある。

『朝京日録』は、1636年金堉が冬至祝祭日の祝賀正使節として明朝を訪問した際の見聞録である。『潜谷集』に収録され、全一巻、文末に申翊作の「跋」が添えられている。金堉が明朝に派遣され、『朝京日録』を作成する間、清が南下して朝鮮を侵略、丙子の乱が起こった。朝鮮は清と講和し、正式に清の宗主国としての地位を承認された。即ちこの訪問は朝鮮王朝から明朝への最後の派遣となり、『朝京日録』も朝鮮文人が書いた明朝見聞録の最後になった。作者金堉（1580–1658）は、字伯厚、号潜谷、晦敬堂、朝鮮後期の重要文官で、多くの功績を持ち、その後さらに3回清朝へ赴いた。本文で使用する『朝京日録』は民族文化促進会が1976年に刊行した『燕行録選集（2）』複製版による。

『入沈記』は1783 年李田秀が正使武官として叔父――聖節兼慰安節の李福源（1719–1792、字綏之、号双渓）――に随行して清朝を訪問した際の見聞録で、『完山家書』に収録され、複製版が『燕行録全集』第30巻に収録されている。『燕行録全集』は本書の作者を李宜万（1650–1736）と表記しているが、文中に出ている派遣人員の名簿や内容、そして『朝鮮王朝実録』の記載を参考にすれば、本書の作者は李田秀と考えられる。李田秀（1759–？）、字君稷、号農隠、李福源の甥で、李晩秀（1752–1820、字成仲、号履翁、履園）の従兄弟である。本書は上、中、下の三巻に分かれ、本文の前に「行中座目」、「凡例」がある。上巻と中巻は日記形式で書かれ、上巻は李田秀が旅行中に記述した『西遊記』を、中巻は同行の従兄弟である李晩秀の『万泉集』を基本にする。下巻にはそれぞれ皇宮、衣服、器物、飲食、財物、鳥獣、言語、土俗など8つの方面にわたる訪問見聞が記される。他に「御制贈詩」、「親友贈詩」、「沿道賦詠」、「徳符心規」が添えられている。『入沈記』は1783年に書き始められ、1786年に完成、20世紀に刊行され、現在はソウル大学奎章閣に所蔵されており、本文でもこれを使用している。

同じく中国訪問の見聞録として、訪問目的、旅行ルート、更に作者の身分に微妙な相違はあるが、多くの燕行録に少なからず類似点が見られる。同一の観光名所を通った時に、作者がよく似た関心を示すのも無理がない。本文でこの三部の燕行録を研究対象にするのも多くの面で顕著な特徴を持っているためである。一つはこれらが16世紀後期、17世紀前期、18世紀後期に作成され、中国の年代でいえば、それぞれ明朝中後期、明朝消滅直前、清朝半ば、即ち明清両朝を跨いで、韓国側からいえば朝鮮前期、中期、後期となることである。両国の時代背景が全く異なる考察の客体を提供していれば、考察の主体にも異なる視角が提供されるため、三部の著作には明確な特色が与えられる。これに基づいてこの三部の作品の内容を考察し、異なる時代背景の下で、それぞれの朝鮮文人が描く異なる中国を明らかにし、朝鮮文人が中国に対して持った異なる認識と態度を分析し、更にその変遷の痕跡と理由を

究明したい。

2、異文化の衝撃

『朝天記』には、1574年許葑が聖使節書記官として明朝を訪問した際の見聞が書かれている。“聖使節”とは朝鮮初期に毎年定期的に明朝へ派遣された使節のことで、派遣の目的は中国皇帝の誕生日祝いである。この時の正規使節は朴希立で、他に質正官の越憲、通事、お供など合わせて36人であった。使節団一行は、1574年5月11日にソウルを出発、朝鮮半島北部と中国東北地方を経由して山海関に入り、8月に目的地の北京に到着、北京で30日あまり滞在した後、9月7日に帰路につき、11月3日ソウルに到着した。6ヶ月にわたる2千キロあまりの旅だった。この使節派遣の正式な名目は明神宗（1563–1620）の誕生日祝いであったが、彼らの全外交活動を見れば、より重要なのは“系譜修正”であった。即ち明朝の史書に書かれた朝鮮開国太祖李成桂の系譜の記録修正である。さらに許葑には、これら公務のほかに、もう一つ個人的な訪問目的があった。即ち柳成龍が「序」で言っているように、

> 私は小国に生まれたが、朝廷の使命で使者として大国の朝廷を訪問することができ、退いては文人識者と談話して、制度礼楽を考察し、文物衣冠の美を見て、誠に愉快でありがたいことである[3]。

中国文化を尊ぶ“小国”の文官として、許葑は中国を性理学の発祥地と考え、訪問をきっかけに中国の文人と親密な交流を図り、奥深い、本場の中国文化を感じ取ることを期待した。にもかかわらず、実際には期待とは大きな隔たりがあり、彼は極度に失望、驚愕することになる。

1） 仏教、道教の盛行

明朝に入った許葑は仏教、道教の大きな影響力に驚く。

> 東側に武安王廟がある。即ち関羽である。土で像が作られ、厳しい顔をしている。雲長はこのようなのか。もし黄泉で知っているなら、こうした祭祀を受けられるだろうか。太祖高皇帝は彼に助けられたことで彼を神とし、世の中の人に尊敬させ、祭祀を行わせた。したがって我々の通ったあちらこちらに廟が立ち、家々はみなその画像をかけ、いかに崇拝しているのかが分かる。しかし、雲長の霊魂は死後も蜀漢の滅亡を止められなかったのに、数千年後に太祖を助けることができる理があろうか[4]。

[3] 柳成龍著、予南江訳、「朝天記序」、『国訳燕行録選集』1、民族文化推進会、1976、262 頁
[4] 許葑、同一書、6 月 24 日の条

昔から、関羽は忠義と勇猛の象徴として中国人に尊敬、敬愛されてきた。明太祖の朱元璋（1368–1399在位）は道教を統治の道具とするため、かつて関羽が援軍を派遣したことを宣伝し、これを王とし、大いに関羽崇拝を呼びかけた。しかし性理学の聖地にある中国皇帝が自ら仙人説を宣伝し、祭祀を盛んにしたことは、許葑には理解できなかった。彼は、関羽は生存中に蜀漢の滅亡を引き止めることができなかったのに、死後千年余りたって明太祖を助けられるはずがないと反駁して明太祖の嘘をあばき、その道教支持政策に公然と不満を示した。

こうした見聞は遼東地域でのものであり、明朝の政治的文化的中心から離れていて、良好な教養を得られなかったためであると解釈することができた。しかし、都に着いても、こうした見聞を得ることに作者はひどく困惑している。

> 私は今日城内を通って、白塔寺妙応禅林がちょうど市の中心に位置し、黄色の紙の布施を求める書きつけを路上に貼っているのに気付いた。そのなかには皇帝の命だとする者もあり、こいつらは嘘つきでじつに憎たらしい。さらに観音寺は西城の近くに建てられ、線香の煙は絶えず、法器の音も大きい。ああ、皇帝のおそばでなおこのようであれば、その州郡でどのようであるかは想像がつくであろう。多くの官吏が前を通ってもいささかの反応もない。なぜであろうか[5]。

仏教寺院が北京城の繁華街に建てられ、僧侶は公然と皇帝の命による布施の求めと告知し、さらに観音寺も宮殿の近くに作られ、線香の煙が立ちのぼり、通り過ぎる朝廷大臣も全く無視する。こうした風景によって作者は、儒学の発祥地である中国においては、儒学は決して唯一無二の崇高な地位になく、仏教や道教など多くの文化がこれと共存しているということに、否応なく気づかされることになる。

2） 陽明学の争い

明朝訪問の前、既に中国では陽明学が盛んであると聞いていた許葑は、それをよしとせず、心の準備をして、朱子性理学の理念によって陽明学の邪説を徹底的に潰すことを期待した。道中中国文人と学術思想の交流を試みたが、大多数の中国文人が陽明学の熱烈な支持者で、容易には説得されなかった。そのため許葑と中国文人の交流は、陽明学に関する中韓両国文人の激しい論争となった。

最初の論争は、1574年6月26日、作者一行が遼陽の正学書院に到着し、中国人儒学者の賀盛時、賀盛寿兄弟、魏自強、呂沖和の4人に会い、挨拶をした後、許葑から話題を提起したときに起きた。

[5] 許葑、同一書、8 月 13 日の条

近頃王守仁の邪説が流行し、孔子、孟子、程子、朱子の学説が弱まると聞いている。大道はそのように滅びようとしているのか。

4人は次のように回答した。

本朝の王陽明先生の学説においては孔子、孟子を先師とし、邪説険悪の人とは全く異なる。さらに彼の文書、業績ともにすばらしく、近世の師匠となり、既に孔子廟で祀られる。

以上のやりとりから、両国の文人の王陽明評価に対する対立は明らかであり、双方とも相手を説得しようとしたが、それぞれ自らの意見に固執し、最終的には許葑がやむを得ず「道が異なり、ともにすることができない」とし、双方は気まずい思いで別れた。

次の論争は、8月2日、北京近郊で許葑が国子監の叶本子と会ったときに起きた。互いに名乗った後、筆談で交流した。まず許葑は王陽明が祀られた過程について尋ね、続いて朱子学の格物致知論によって王陽明の致良知説に反駁した。

そもそもいわゆる良知とは、天理本来の妙である。強要し得ず、人はみな肉親を愛し、先輩を尊敬するものである。およそ学問とするものは、良知を捨てれば、ほかに求めるところがない。しかし人の生とは、気質と欲望が重なり、ぶつかって、本来の天理は曖昧になった。したがって聖人の教育も必ず「居敬」をその基とし、「格物」はその知識を得て、それから理屈が分かれ、聖人になるのである[6]。

ここでは朱子学と陽明学の最も本質的な違いに触れている。朱子学は居敬、格物致知を主張し、外部の事物の普遍的な規律を求めることを強調する、つまり知識に対する究明を重んじる。他方、王陽明は致良知説、知行合致説を提起し、注目する対象を人の内心の世界へ移し、実践の重要性を強調している。両者は異なる側面を強調し、いずれをよしとするのかは人によって異なるため、実際の状況によって判断するほかない。したがって許葑のこうした観点に叶本子は賛成しなかったが、はっきりと反対する理由も示さなかった。

許葑はまた、王陽明の言う「もしそれが私に合わなければ、たとえそれが孔子の言葉であっても、私はあえて信じない」とは、聖人の権威に対して正面から挑戦するもので、大逆無道というほかないとし、また陽明学は事物、書簡の廃止を主張す

[6] 許葑、同一書、8月2日の条

るのは、禅宗の流れに属するものだと指摘した。これに対し、叶本子は王陽明の弁解をした。

> 私の意に合わなければ、たとえ孔子の言葉であっても信じない。これは真理の意を信じて極端に言ったもので、孔子に背くものではない。……したがって、意味から意図を推察し、字面のみによって意思を誤解してはならない。……禅宗は心身事物を離れ、静寂に委ねるのに対し、王陽明は多くの功労と業績を築いている。ゆえに王陽明を見極めるには禅宗に近く、禅宗ではないところを探さなければならない。いわゆる中庸に言う「誠意があれば分かる」のことである[7]。

叶本子は王陽明の言う「私の意に合わなければ、たとえ孔子の言葉であっても信じない」は、決して孔子に対する不敬ではなく、真理を重んじることは権威を重んじることに勝るとする強い決心を表明しているに過ぎないとし、許葑に対し「意味から意図を推察するのはよいが、文で意思を誤解してはいけない」と注意をうながした。陽明学の禅宗寄りの表現に対して、叶本子はこう反発している。仏教の基本的な主張では消極的な出世を求めるのに対し、王陽明は積極的に出世しようとし、多くの業績を築き、禅宗とは根本的に異なっている。『中庸』の「誠意があれば分かる」を引用し、許葑に王陽明への先入観を捨て、客観的な態度で正確な評価をするべきだと説得した。しかしこれらの解釈は全く許葑の思想信念を動かすことができず、彼に中国における朱子学の衰退と陽明学の浸透をより強く感じさせ、大きなショックを与えたのみとなった。

3、王朝末期の見聞

金堉の『朝京日録』は、1636年の冬至祝祭日祝賀の使節として中国を訪問した際の見聞録である。この使節団一行は160人であり、1636年6月15日に出発準備をし、17日に出発、海路によって中国入り、11月5日北京玉河館に到着、1637年4月22日北京を離れて、同じく海路により帰国、6月2日にソウルに帰着した。その他の使節団と比較して、この派遣には二つの特徴がある。一つは中国滞在期間が一年近くと長かったことである。北京だけで5ヵ月半滞在した。これは、途中丙子の乱が起き、使節団の帰国を遅らせたためである。もう一つの特徴は、訪問が海路によったことである。これは、当時満洲族の建てた清政権が中国東北地域を占領し、中韓の陸路交通を阻んだためである。またこの派遣は朝鮮使節の最後の明朝訪問となり、8年後の1644年には明朝が滅亡し、この資料も明朝滅亡直前の韓国人による最後の見聞

[7] 注 6 に同じ

録となった。しかし、訪問期間が長く、途中重大な事件がいろいろと起きたにもかかわらず、この『朝京日録』は記述が簡略で、他の燕行録のように日々の見聞の記録もなく、しばしば数日間の日程が省略されている。全体的に、内容は明清軍の戦況や明朝官吏の記述に集中している。

1） 明清の戦況

この記録によると、作者の関心は清軍[8]の軍事活動にあった。8月9日使節の船は南汎口に停泊、「奴らは六月西から方屯昌平州を侵し、その距離は皇城より二十キロである」[9]という噂を耳にした。それから数日、使節団は絶えず[10]関所からの砲音を聞いており、清軍と明軍の間で激しい戦争が行われていたことが伺える。作者は道中この戦況と結果についての収集と記録に力を入れ、精力的に取り組んでいた。

> 主人の家の近くに漁師がいて、関所から来て言うのには、敵の主力は永平府にあり、彼らが略奪した物は車に乗せられ、二十頭のラバに引っ張らせた車が、全部で八百あまりあった。彼らは北の関所から出たがっていたが、各関所には明軍の守備があり、通ることができない。高太監、祖総兵が明軍十五、六万人を率い、敵を包囲した。皇帝は敵を一人も逃してはならないと命令した。現在は対峙している[11]

これは清軍が関所内に攻め込み、財産物品の略奪を狙って、それを果たしたことを説明している。明朝は一方では関所の監守を命じ、もう一方では主力軍隊を調達して清軍を包囲させ、一気にこれを潰そうとした。状況は明朝に有利に見えたが、戦いの結果清軍は撃滅されず、「北へ逃亡した」[12]。 大量の兵力を動員した明軍にとっては、これは大きな失敗であったと言わざるを得ない。この戦いで明軍がなぜ勝利を収められなかったか作者は説明していないが、清軍の戦略方法に関する分析からはそのヒントが得られる。

> 関所外には敵が四千近くあり、二組に分かれて、時には沙河所、中後所を、また時には中前所に攻め込む。山海関から羅城までは二キロ近くあって、敵は家屋に火をつけ、十日あまり滞在してようやく去った。これらの敵は兵法に詳しく、彼らが関所外を攻撃していたのは何かを得るためではなく、実際には内部が空いて明軍が寧遠や錦州に侵攻するのを心配し、故

[8] 後金は 1636 年 4 月に国名を「清」に変更した。金堉の明朝訪問は 1636 年 6 月に開始するので、文中では満洲族政権を「清」とし、その軍隊を「清軍」とした。
[9] 金堉、同一書、116 頁
[10] 金堉、同一書、118-119 頁
[11] 金堉、同一書、119 頁
[12] 注 11 に同じ

意にゲリラ騎兵を守備に用いたのである。ゆえに彼らは域内に入らず、往き来して、空威張りする。関所内の軍隊が撤退したのを聞いて、彼らも撤退したのである[13]。

ここでは、清の一部の軍隊によるゲリラ活動は、自らの内部の空白地帯が攻められないよう、明軍を牽制するためであったと分析されている。これによってまた作者は、清軍の指揮者は軍事に詳しく、扱いにくいと指摘し、これこそ優位にあった明軍が勝利を収められなかった理由の一つであろうと推測している。これらの見聞によって、清の脅威はより強く感じられた。

2）官吏の腐敗

明朝が300年を経て、隆盛から衰退へと変わっていった要素はさまざま有るが、金堉は『朝京日録』において、自らの経験から一つの重要な理由として、ある文武官吏の腐敗を取り上げている。

将官はそれぞれ屋敷を修繕し、自らの部下の兵士を使いにしている。兵士たちは十分な休みがとれず、文句が多い。近頃多くの人が病死し、死んだ後には燃やされ、煙が絶えない。都督は長く公務に就かず、将官とも顔を合わせない[14]。

駐屯兵1万2000人の島において、将官らは兵士に自らの豪華な邸宅の建造を強要し、兵士は相次いで過労によって倒れていったが、重要な軍務には疎かであった。これらのことは、別の面から明軍敗退の内在的要因を提起している。

明朝訪問にあたって、金堉は明朝官吏の腐敗をその目で見たばかりでなく、実際の被害者にもなっている。いわゆる使者の対応を担当する部門の官吏に、大変な金品を要求されたのである。

礼部尚書の姜逢元は極度に欲張りで、先日は諮文の件で小甲（職位）于文の責任を追求し、またよく殴り、冷えた部屋に閉じ込める。目的はつまり金品の要求である。于文は来るたびに、怖がりながら「尚書は欲張りで賄賂がなければ罪を免除してくれない」と言う[15]。

礼部尚書のこうした間接的な賄賂要求を金堉は非常に軽蔑し、一度送ればきりがないことを憂慮し、ただ知らないふりをして、何度も書簡を出して説明した。ようや

[13] 金堉、同一書、122 頁
[14] 金堉、同一書、115 頁
[15] 金堉、同一書、126 頁

く于文は釈放されたが、金堉が求めた朝貢ルートの変更や硫黄購入の許可の要請は体裁よく断られた。こうした教訓があったからこそ、以後、明朝の官吏に金品を要求される際には、使節団一行は適当にあしらうようになった。1月5日の記述には、以下のものがある。

桃花紙57枚、雪花紙7巻で提督の要求を満たし、またお金を差し上げた。提督は不満でお金を受け取らず、怒って帰った[16]。

ここから明らかなように、明朝の官吏は自らの面子も惜しまないほど欲張りで、使節団一行は、彼らを満足させるにはすべての欲望を満たさなければならないと認識し始めた。3月17日尚書に銀粧刀、白扇子各10個、鏡面紙10巻を要求された使節団は、一行が持参した物品をかき集めて、銀粧刀12本、扇子10本、白紙12巻を探し出し、すべてを礼部尚書に渡した。これに始まり、明朝各部門の官吏からも金品要請がますます公にひどくなった。作者の大まかな計算によれば、大堂1人だけで使節団に人参７キロを要求している。これは、当時の市場相場で換算すると、銀420両にあたる。尚書、大堂、提督、左堂などの礼部官吏たちは自ら朝鮮使者に金品を求めるのみならず、更に他の部門官吏に代わって使節団に金品をゆすった。これは、使者に重い負担を与えた。『朝京日録』によると、明朝末期において官吏の腐敗は一種の普遍現象[17]となり、国家機構も正常に機能せず、社会の風潮も悪くなり、国力の衰退にいたった。

4、盛世文明の体験

李田秀の『入沈記』は、1783年作者が叔父の李福源に随行して清朝を訪問した際の見聞録である。派遣の名称は瀋陽問安使である。当時清の乾隆帝（1711–1799）は4度目の瀋陽巡行であったが、朝鮮正祖国王（1752–1800）はわざわざ使者を派遣し乾隆帝の長距離出向を慰めようとした。使節団は1783年6月13日にソウルを出発し、7月1日義州に到着、5日に渡河の予定であった。しかし、乾隆皇帝の巡行が7月から9月に順延され、躊躇の末、7月18日に河を渡り、清朝境内に入った。使節団一行は8月1日に瀋陽に到着、9月5日に皇帝歓迎式に参加して、9月22日都への帰還を見送った。翌日の9月23日帰路につき、10月9日ソウルに戻った。他の多く燕行録とは異なり、この時の訪問先は北京ではなく、瀋陽であり、距離は相対的に近かった。また乾隆帝の日程変更のため、使者らの瀋陽到着が早くなったことで、多くの時間ができて、清朝社会を体験、観察することができた。

[16] 金堉、同一書、128 頁
[17] 金堉、同一書、127 頁

1） 進んだ文物

『入沈記』では作者が清朝の建築、服装、飲食、風俗など社会の各方面、とりわけ初めて見た珍しい物や、自国より進んだ文物に対して多大な興味を示した。例えば、皇帝を迎える時に商人が懐から時計を取り出したのを見て、非常な好奇心[18]を示している。懐中時計に好奇心を持つなど清朝の進んだ技術を意識的に観察し、詳細な記録につとめた。例えば清朝と朝鮮の糸繰り車の違いに気付き、これを比較して、清朝のものは1日で朝鮮の2日分の糸を作ることできると分かり、「この方法を自国に移せば、得られる利はじつに大きい」[19]と考えた。また清朝の篩の巧みな構造に気付き、「省力で効率がよい」[20]とも評価している。他にも李田秀は清朝の綿加工、造紙方法についても詳細な記録を残している[21]。さらに清朝で一般的に使用している煉瓦には、より大きな興味を示した。

> 城門と町並みは始めて見た。石が一つも使用されず、一定間隔でレンガと灰によって造られ、柵門の善政碑のようである。のみならず、壁、庭に敷く床、ベッド、段階のすべてが石の代わりにレンガを使用しており、いたるところにレンガを見る。その作製方法が入手できれば、まるでブルネイの木綿を手にいれたようなものである[22]。

作者は、清朝は城壁にも、石碑、床、段階にも、すべて石のかわりにレンガを使用していることに気付く。石よりもレンガの方が人力、費用の節約になるのをよく知っており、レンガの作製方法を自国に持ち帰り、国民に貢献したいと考えた。したがって中国滞在中、一貫してレンガの作製方法に留意し、かまどの所在がわかるとわざわざ見に行った。

> みんなが馬をおりて近づくと、かまどは土台のように丸い形をして、上下とも穴があいている。扉の外側は泥で封じられ、上下に穴がある。穴から中を覗くと、中にはレンガの生地が正方形に積み重ねられている。扉のあたりに石炭が積み上げられ、後ろにはまた穴がある。扉は方形で、レンガで密封されている。これが排煙口であり、レンガを焼く時に開けるようになっている。こうしたかまどが3つある。かまどの北側には出来上がったレンガ、かまどの南側には焼く前の生地が置いてある。作製方法を尋ねると、どのような土でも必ず水と混ぜて泥状にし、木の枠で型を作り、かまどに入れて、火を焚くのである。また3、4日に一度火を変える。1回で2

[18] 李田秀、同一書、253 頁
[19] 李田秀、同一書、101 頁
[20] 李田秀、同一書、98 頁
[21] 李田秀、同一書、116・303 頁
[22] 李田秀、同一書、90 頁

ワンの煤、1ワンの薪を使用する（1ワン、2ワンについてはただその人の話をそのまま書き、ワンの意味も量も分からない）[23]。

かまどに着くと、作者はじっくりとその形を観察し、作製方法を尋ね、そして教えを忠実に記録するため、漢文での記録に韓国語の「완」も併用した。ここからレンガを自国に伝えようとする彼の苦心が容易に読み取れるだろう。

2） 強大な国力

『入沈記』からは、作者の目に映った中国が豊かで発展した国であることが分かる。いくつかの面から読み取れよう。例えば、初めて中国へ来た作者一行は、友人の家を訪ねたが、席につくと、まず主人が茶菓子を出してこれを招待した。そこには蜜柑もち、竜眼、レイシ、松の実、ハシバミの実、スイカの種などあった。松の実やハシバミの実は東北地域の特産として珍しくない。しかし、竜眼、レイシなどは南方の果物であり、交通、貯蔵施設ともに遅れていた18世紀において、産地から遠く離れた北方で手に入れることはじつに難しかった。主人は一度にこれらを出して、お客を招待しているから、この家柄の豊かさが十分に表されている。茶菓子の後、さらにおかず、肉、スープ、ご飯などの「蒸籠が積み重なって出てきて、大皿が並べられている。これはわが国ではたいへんなごちそうといえる[24]」。士大夫としての作者から見ても、全くのごちそうであって、この家の豊かさを実感しているのである。

また、清朝の町並みはにぎやかで、店が軒を連らね、繁栄そのものであったことも作者の興味をそそった。

西市の市場がより繁華で、豊かである。外には屋根よりも高いテントがかけられ、目眩がするほどの極彩色が塗られている。テントの外には看板が立てられ、大げさなほどの大文字が書かれている。……物品は車に載せられたり、肩で担がれたりし、車が行き交い、人がごった返している。道の北の薬局があって、その壁際には千眼たんすが置かれ、各種の薬草が入れられ、外には薬名が書かれている。……アーチ形の建物の間には2軒の書店あり、長い板にいろいろな本が積み上げられている。……道の南には皮製品の庄があり、外に皮が掛けられてある。……他にもシルクや布地、箱、雑貨の店がずらりと並び、店を持たない世帯は10軒のうち1、2軒もない[25]。

この記述からは、瀋陽市内にたくさんの店が立ち並び、車が行き交い、繁栄してい

[23] 李田秀、同一書、303 頁
[24] 李田秀、同一書、87 頁
[25] 李田秀、同一書、120-122 頁

た様子が分かる。これは、当時、すでに商品経済が発展していたことを示している。更に甚だしいのは、作者が市場で耳掻きを生業とする人を見つけ、感心して次のように言っていることである。

> 遼瀋ではただそうであるのみではない。ごく些細なこと、ものであっても、それを商売とする人があって、またそれを作る職人がいる[26]。

これは当時、清朝において社会的分業が高度に細分化され、商業、サービス業がすでにかなりのレベルに発展していたことを示している。

作者はまた、皇帝の到着前に瀋陽故宮を見学し、その規模の大きさ、彫刻の素晴らしさに感心している。使節として皇帝の送迎など各式典にも参加し、多くの恩賞を受けて、清朝の豊かさを実感した。

3） 率直な友人

『入沈記』中巻の原題は『万泉記』であり、主に李晩秀、李田秀と清朝文人の交流の記録が大きな割合を占めている。交流相手には、楊秀才、張秀才、王監生、石秀才、単生、劉克柔、張裕昆などがいた。彼らとはほぼ初対面であり、偶然の出会いから始まったが、彼らは朝鮮使者に対して非常に友好的で、積極的に付き合ってくれた。その中で最も代表的な人物は、張裕昆である。厳密に言えば、張裕昆は文人ではなく、商人であった。彼は科挙で官吏になる道を捨て、小さな店を経営して生計を立てていた。詩ができず、ごくまれに友人に頼まれて序文を一つ二つ作成するのみであった。しかし、彼の豊かな学識や誠実な性格は朝鮮文人を強く魅了し、8月23日に知り合い、9月22日に帰国するまで、双方はほぼ毎日のように通い合い、懇談した。その話の内容は、大体以下のように分類できる。

（1） 文化芸術：中国の文書作成における第一人者は誰であるか、銭謙益の人柄、学識への評価、中国詩歌の押韻方法、詩歌、絵画、書道の鑑賞と評論、仏教、西洋学への認識に関する交流、両国の学術界で朱と陸のいずれを尊ぶかなど。

（2）軍政時事：例えば満洲八旗と漢軍の人数、モンゴル勢力の強大、清王室の名字、太子を立てない理由、清朝の禁制と禁書、内閣の人数と派閥の問題、権力者関連、福常安、福康安、清の土地制度、チベット、金川などの辺境情勢。

（3）社会習慣：科挙制度、目覚まし時計や自転車などの先進的なもの、なまこや朝鮮人参、清心丸などの特産品、冠婚葬祭、満族と漢族の通婚、西洋人や西洋制度、朝鮮の衣冠や儀礼、女性の纏足など。

（4）旧王朝時代のこと：呉三桂、明朝の永歴帝、金聖嘆や明朝の残留民、朝鮮斥和派の尹集、沈翼翰、呉達済の3人の行方。

[26] 李田秀、同一書、89 頁

以上の内容から、彼らの話し合いは外のものでは西洋の文物、内のものでは清の皇室秘話など各方面にわたり、敏感な話題に及ぶこともあったことがわかる。清朝は文字に厳しい規制を加え、文人の自由な発言を禁止、特に外国人との交流を禁止する政策を取っていたが、作者の質問に対し、張裕昆はほぼあますところなく回答している。張裕昆との交流を通して、作者は心に抱えていた多くの疑問を解決し、清朝に関する多くの重要な情報を得て、清朝の社会をより全面的に、かつ深く理解することができた。

5、結論

以上に述べたように、本稿では各作品の特徴を明確にするため、相違点に注目する原則に基づいて、三部の燕行録の内容を考察した。16世紀の許葑『朝天記』から17世紀の金堉『朝京日録』をへて、更に18世紀の李田秀『入沈記』に至るまで、燕行録に描写された中国には大きな変化が見られる。許葑の『朝天記』には、朱子学が既に衰退し、仏教、道教、陰陽学が盛んとなっており、これに対して、許葑が心を痛め、「邪説が乱れ、国は滅亡しようとしている」[27]とため息をついたことが示されている。金堉は中国の戦乱を見て、官吏の腐敗を感じ取り、内外における危機を前にして、思わず「朝廷のことを心配せざるを得ない」と口にし、明朝の前途を憂慮した。金堉のこうした憂慮は8年後に現実となり、明朝は滅亡した。李田秀の『入沈記』においては、中国は先進的で豊かな国であり、作者がこれを羨ましがらずにいられないことが示されている。彼は中国の先進的な技術の観察、記録につとめ、広く友人と交際して、中国文化への理解を深めていった。

この三部の作品において、中国は異なる様相を見せている。これは、当時の中国社会の客観的現実と深く関わっており、また中国に対する燕行録の作者の主観的な見方とも関係している。作者の見方を左右する要素はさまざまであるが、そこには作者本人の思想意識、当時の朝鮮社会の状況や思想潮流、また中韓両国の関係などが含まれている。

『朝天記』で許葑が中国の学術や宗教に執着し、中国文人と激しい議論を繰り広げたのは、両国の異なる社会的、歴史的背景によるものである。明朝中後期に、知識を重んじ、実践を軽んずる朱子学の学説は既に欠陥を見せはじめ、偽道学の隆盛を招いた。こうした弊害を取り除くため、陽明学は致良知説、致行合一説を提出して、内在の良知を実践に生かそうと主張し、多くの人の賛成を得た。また中国は国土が広大で、民族も多く、古来より多様な思想文化や宗教信仰が同時に存在し、ひとつのイデオロギーで統一することが難しかった。そのため、中国文化は一貫して異文化並存の特徴を持っていた。しかし16世紀の朝鮮では、性理学は社会発展に適

[27] 許葑、同一書、6 月 26 日の条

する新しい思想としてようやく主流的地位を獲得し、活気と活力に満ちあふれ、文人学者に大いに受けられて、政治、社会、文化などの各方面において絶対的な指導的地位を占めていた。許葑一行が担った「系譜修正」の使命も、名分論を中心とする性理学が朝鮮各界に強く根付いていた様子をよく反映している。したがって、儒学以外の仏教、道教は勿論、儒学内部でも性理学は優位にあり、他の学説はすべて「異端」とされ、強い圧迫を受けた。こうした環境の中で許葑は当然、性理学こそが唯一の真理であり、性理学こそ国家と社会の大黒柱となることができ、性理学を捨てれば社会論理も崩壊し、国家も滅びるに違いないと考えた。そのため、中国の現実を見た彼は大いに驚き、憤然とこれに批判と抗争を加えることとなる。中国社会を見つめる際、許葑の『朝天記』は思想理念を重視し、朱子理学を絶対的に崇拝したが、これがこの燕行録の明らかな特色である。

金堉の『朝京日録』は、許葑の『朝天記』に見られるイデオロギーへの執着から脱却し、関心の重心を明朝の軍事政治におき、明軍と清軍との戦い、明朝官吏の腐敗を描写することによって、客観的に明朝の内憂外患、不安定な社会的現実を反映しており、明朝滅亡直前の真実を映し出している。文中で金堉は始終冷静かつ客観的な態度を取っているが、これは同時代の特殊な中韓の背景とも関係している。17世紀初め、清の勃興は明とともに朝鮮にも脅威を感じさせた。金堉の今回の訪問目的は、明朝政府に朝貢ルートの変更と硫黄の購入許可を要請するものであり、朝鮮が現在、厳しい状況の下でいかなる対策を取って、危機から政権を守ろうとするのかを説明している。こうした意味から、明朝政府は必要時に朝鮮にとっての重要な頼りとなり、同時に、明清の実力対比は朝鮮王朝の外交政策の行方、ないしは朝鮮王朝の存亡にも関わっていた。こうした状況にあって、朝鮮王朝の大臣として明朝を訪問した金堉は、意識的、無意識的に明朝社会内部の状況をよく考察し、明清の戦況を分析して、この明末期の軍政を反映した報告を書いたのである。

しかし、18世紀になって、清朝は中国を100年あまり統治し、中国社会では長期的な安定が実現され、政治も清廉で、工商業は高い水準に達し、封建社会は高潮期に入り、「康乾盛世」と言われる隆盛が訪れた。中国のこうした発展は中国を訪問した朝鮮使者に深い印象を残し、一部の開化された人は伝統的な華夷観、名分論を捨て、清朝の進んだ文化に習って、国民生活に貢献しようと提起した。彼らは「北学派」と呼ばれ、その思想は李田秀の『入沈記』にも一定の影響を与えている。『入沈記』で李田秀は清の先進的な文化を認め、清の進んだ技術と文化を学び、下層インテリと活発な情報交換を行ったが、これらはすべて朝鮮王朝に新たに誕生した実用重視の思想潮流を反映していた。但し、工商業を扱う立場や態度において、李田秀と北学派にはやはり一定の隔たりが存在していた。今後は、北学派学者の燕行録を李田秀の『入沈記』と対照して研究することが有意義であろう。